

短歌

加藤たまも

かつる葉の音もさびしき山寺に秋をやせては鐘もる身かな

眞白なる白梅の花しとねとし亡骸うめぬわはれうぐひす

小さな胸の憂ひに鏡をも忘れて迎ふとしのはるかな

亡き人と我名とかきし辻堂に昔をもほゆ初しぐれ哉

菅原喜代藏

阿修羅王魔どもを具して人の世にせめよ

す如も夜は黒み行く罪の子を免うかの様秋雨はしといに降り

來草堂の秋駒が嶺やさ霧まじろき裳して神々しく立ちぬ秋晴れの日を

敏子

背の君は遠き暗路に亡き乳兒はやせて招くといたづきの夢

骨にしむ霜夜のかねの音をたどり又も亡き兒の夢に泣きぬる

川口愛子

限りなきみ空のはてをさまよひの小さき星

に似たらずや我一ひらの小さき帆の影見送りて夕日に泣きぬ木からしの海

秀子

さだかなる行衛もなく徒らに亂れ啼きする夕鳥かな木枯や隠岐への舟は見えずなりて光りさえ來る七星哉

千山樓主人

うらぶれて冷扉に眠る我果にさも似たらずや雪の水仙

いくとせを家に傳はる劍うりてわはれ書から我さだめ哉

竹島芙蓉

玻璃の戸に霞たばしるわしたなりひと細眉を刷り落しつる

若春や笑みたいへたる唇のいとも小さし紅梅の花

紅梅にうすものかざし舞ふ姫の袖に春たつ朝神樂哉

新年御題 起 雲

宮島や松影染ゆる波の上を

初あけ鐘のさゝけり行く

短歌 伊勢白子区内 眞宮苑